

「山・住」合同分科会では、「中山間地を活かす流域モデルの形成」、「広域連携による安全・安心な地域の形成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	副学長	大貝 彰
報告者	浜松市	市民部長	岩井 正次
行政	豊橋市	市長	佐原 光一
行政	豊川市	市長	山脇 実
行政	新城市	市長	穂積 亮次
行政	設楽町	町長	横山 光明
行政	平谷村	村長	小池 正充
行政	根羽村	村長	大久保 憲一
行政	売木村	村長	清水 秀樹
行政	喬木村	村長	市瀬 直史
経済	森町商工会	会長	山本 充喜
経済	東栄町商工会	会長	井筒 睦治
住民	愛知大学総合郷土研究所	研究員	平川 雄一
住民	川名ひよんどり保存会	会長	前嶋 功

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長



ご紹介いただきました大貝と申します。
よろしくお願いたします。

今回のサミットが第22回目ということで、初めて気づいたのですが、私が豊橋の大学に来たのが平成5年で、ちょうどそのとき第1回のサミットがあったのだということを今、知りました。私自身は、このサミットに10年前ぐらいから参加させていただいております。ここ最近では、この「山・住」分科会のコーディネーターを連続して務めさせていただいております。

何回もこの三遠南信地域の皆様からいろいろな取り組みの状況とか、あるいはこれからあるべき姿についてご発言いただいて、着実に少しずつ前に進んでいるのかなと感じております。ただ、年1回のサミットということで、議論が一気に進むというのはなか

なかできないのですけれども、着実に進んでいるのかなという印象を持っております。さらに、今年度 SENA が新しい体制になったということで、その中で具体的なこの中山間地域の取り組みが具体化していけばなと思えますので、皆様、よろしく願いいたします。

座らせていただきまして進めさせていただきます。よろしく願いいたします。

本日は、豊橋市の佐原市長様はじめ、先ほどの全体会でパネリストとして参加された新城市の穂積市長さん、また、この場に参加されている皆様、どうかよろしく願いいたします。

それでは、進行についてお話をします。

最初に、前年度のサミットの議論、この「山・住」分科会の議論のまとめを行い、その後、今回の「山・住」分科会のテーマについて、事務局から説明をいたします。

次に、浜松市市民部の岩井正次部長さんから、「浜松市の中山間地域振興」について、ご報告をいただくことになっております。

このご報告を踏まえまして、今回、テーマとしては、これはビジョンの中に掲げられているテーマでありますけれども、「中山間地を活かす流域モデルの形成」、そして、「広域連携による安全・安心な地域の形成」という、こういうテーマで、今後推進をしていく事業等についてご意見をいただけたらと思っております。

それでは、早速ですが、事務局から、先ほども申しました昨年度のおさらいと今回のテーマについて、説明をお願いしたいと思います。よろしく願いします。

事務局

それでは、前年度の議論のまとめと今回のテーマについて、ご説明申し上げます。

前年度の「山・住」合同分科会では、参加者による取り組み事例などをもとに、さまざまな議論がなされました。

内容は、まとめると次の2点となります。

1点目としましては、中山間地域の定住促進には、人やものの交流、連携を図ることが重要であり、そのためには、それぞれの地域での雇用の場をどのように創出していくかがポイントとなります。

そこで、既に小さな取り組みはなされていますので、それらを広げ、人でつなぐ、あるいは仕組みでつないでいく、そうした取り組みが三遠南信地域の中で必要になるのではないのかというのが1点目です。

2点目としましては、この地域の持っている資源を活かした取り組みをより活性化させ、定住促進や、この地域の活力の向上につなげていくには、情報発信が欠かせません。そのために、SENA を中心として、体制の強化、整備をする必要があるのではないかというのが2点目でございます。

そして、今回の議論のテーマについてです。

「中山間地を活かす流域モデルの形成」に向けては、各地域の定住促進施策などの推進のため、人、ものの交流、連携を図るとともに、情報発信体制の整備・強化を進めることが重要であります。

また、地震や台風などによる広域的または局地的な災害に対応するため、県境を越える防災体制の強化について相互に連携して取り組み、そうしたことをする必要があります。

そこで、ビジョンに掲げます重点プロジェクトの推進状況の確認・評価とともに、次年度以降、どのように進めるかを議論するため、ビジョンの「山・住」分野の基本方針であります「中山間地を活かす流域モデルの形成」、そして、「広域連携による安全・安心な地域の形成」を今回のテーマとして設定いたしました。

以上で説明を終わらせていただきます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

今回のテーマというのは、いわゆる、この「山・住」の分野の基本方針である、ビジョンの基本方針となっている部分について議論するということでもあります。そういう意味においては、かなり幅が広いわけですが、具体的なそれぞれの取り組み等について、ご報告をいただけたらと思います。

それでは、その意見交換の前に、話題提供という形になるかと思いますが、「浜松市の中山間地域振興」という題で、浜松市の市民部長岩井正次様よりご報告をいただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

■報告

浜松市 岩井市民部長

ただいまご紹介いただきました浜松市市民部長の岩井でございます。今日は、このようなサミットの席上で我々の浜松市の中山間地域の施策を発表する機会をいただきまして、どうもありがとうございました。

これは、御存じのとおり、浜松市の地図でございまして、皆さん、本当に、もうおわかりになっていると思いますが、浜松市は広うございまして、東西で52キロメートル、南北で73キロメートルという大変広い土地でございます。その上の北側のところが中山間地域ということで、天竜区の5地区と北区の引佐町の北部、これを中山間地域と言っております。そして、特に天竜の上の北の方の4地域は、これは過疎地域に指定されているという、こういう状況でございます。よく我々申しておりますが、国土縮図型政令指定都市と言っている、山あり、川あり、湖あり、海ありと、そういうような土地柄でございます。

これが、数値で見る浜松の中山間地域ということでございまして、市域面積、先ほど申しましたが、1,558.04平方キロメートル、全

国2位でございまして、わかりやすく言うと、伊豆半島より広いと、そういう土地柄でございます。

そのうちの中山間地域は1,022.81平方キロメートルですので、65.65%。そして、人口ですけれども、浜松市の人口は81万人ですが、中山間地域は3万5,817人、4.42%ですけれども、実は15年前、平成12年は4万5,977人。ですから、15年で22%、人口が減したと。そして、ここに記載してございせんけれども、世帯数につきましては、横ばい、むしろ増加傾向にあるという、それはどちらの地域も同じかと思っております。そして、高齢化率39.1%、市域全体の24.5%と比べかなり高うございます。そして、この中山間地域には337の集落があるのですが、そのうちの128集落が高齢化率50%以上という状況でございます。

これは、中山間地域の一つですけれども、北区の引佐町渋川というところ。これは盆地でして、非常にのどかな田園風景が広がっているところでございます。シブカワツツジという静岡県指定の天然記念物のツツジが有名なところで、キャンプ場があります。そして、世帯数254世帯に665人が住んでいるというような地区でございますが、実は、新東名が開通しまして、浜松いなさインターから車でわずか15分でこういうのどかなところに来られるというようなことでございます。

これは、天竜区の水窪町大沢というところ。茶園等がございまして、これは、標高740メートルほどございまして、「天空の里」と言われております。6世帯8人がこの大沢地区に住んでおります。そして、ここでは農家民宿などもございまして、このような地域が点在しているというところでございます。

そして、中山間地域、現状と課題というところで、まずは、よいところが果たしている役割。これは、もう皆様御存じのとおりでございます。自然が豊かであるとか、心のふる

さととか、そして、何よりも古きよい伝統文化が残されているというところがございます。そして、こちらにございますように、水や電気の供給源、さらには森林が防災機能を担っていると。それから、自然の二酸化炭素を吸収しているというような、その役割、これを十分皆様も認識されていることだと思います。

どちらの地域でも同じだと思いますけれども、特に古きよい伝統文化。私も、こういう伝統文化を中山間地域に特に残していこうということで、無形民俗文化財保護団体連絡会ということで、19の団体。これは、田楽とか、おくないとか、ひよんどり、歌舞伎等々を保存されている皆様方を守るような連絡会を平成25年3月につくりました。今日ご出席の前嶋さんに会長をお願いしているところでございます。そして、地域全体でこういう無形民俗文化財を保存して守っていこうという連絡会を立ち上げたところがございます。

そういういいところの反面、困っているところ、課題でございます。どちらも同じだと思います。過疎化、高齢化。先ほど言いましたが、高齢化率39%。それから、ひとり暮らしの高齢者の方々の生活支援をどうするか。あとはインフラ整備、これも重要なことですが、なかなか思うようにいっていないと。そして、近隣の集落機能が低下してきている。集落機能が低下しているということ、これは大きな問題でございます。例えば、浜松には736の自治会があるのですが、そのうちの10は、若干少ないと思うのですが、10は1桁の世帯しかない。つまり、5世帯とか6世帯とか。なお、50世帯以下のところもまたかなりあると。ということは、近隣の自治会組織がなかなか維持していけないということ、これは大変重要な問題があるかと思っております。それともう一つは、先ほど少し触れました。伝統文化の跡継ぎがいないと、こうい

う現状もございます。

字が小さくて恐縮ですが、それで私たち、今、平成22年から平成26年の5年間の中山間地域振興計画というのを進行しております。そして、来年度からの新たな振興計画を今、作成中でございます。この中にいろいろな事業、例えば、計画掲載では236の事業を掲載してございます。そのうちのインフラ整備とか施設維持管理等の投資的事業を除くと137事業、これが庁内でいいますと31課にわたる、そういう事業を展開しております。

例えば、ここでは交流・居住促進事業。これは、具体的には67の事業がございます。そして、次の生活支援事業、これは46の事業を行っております。あとはハード的なものとして地域公共交通維持事業とか、移動手段の交通関係とか森林管理維持事業等々を行っております。

その計画を今、進めているわけですが、そのうちの代表的なものとして一つ。こちらに「山里いきいき応援隊」の活用と。これは、総務省がやっていた地域おこし協力隊というのがございました。緑のふるさと協力隊という制度もありましたが、こちらが1年でしたので、その隊員の任期といいますか、これを最長3年まで延ばせるように衣がえしたのが「山里いきいき応援隊」というものでございまして、各地域に一人ずつ、若者を公募したところ来ていただいて、このピンク色のところは、女性が4人行っているんですね。それと男性が2人と。今、そこで活躍していただいております。それで、こここのところに、小さい文字で申しわけございませんが、中山間地域アドバイザーというのを3名、今、委嘱しております。お一人は地元の文化芸術大学の先生です。もうお二人は、この地域に入った隊員のOBとOG、男性1人と女性1人。ここにその隊員から定住された方がいらっしゃいます。そういう方々を、今、活躍されている応援隊の皆さんの相談員、アドバイ

ザーとして委嘱してございます。

ここでたまたまお二人を紹介させていただきます。水窪町にいらっしゃいます佐藤さんという方。埼玉県出身です。埼玉県から出たことがなかったけれども、まず浜松だということに来ていただいて、今、地域に溶け込んで、お祭りとか、行事とか、農作業とか、一生懸命頑張っていてやってくれています。

もうお一人も、これは龍山に堀田さんという方が入っています。この方は県内の藤枝市の出身です。この方は山が大好きだと。天竜美林に恋い焦がれてこちらに来たと、そう言っていていただいております。

全部で6人の皆さん、非常にその地域に溶け込んで、地域の皆さんと一緒に、いろいろな作業、お祭りとか、そういうことをやっていていただいております。

もう一つ、我々が今行っている事業で、「中山間地域まちづくり事業」というのがございます。これは、中山間地域内に所在するNPO法人、NPO法人を新規に立ち上げて結構でございますけれども、地域の課題とか、その地域振興のために事業をご提案いただきます。そして、ここで我々が市で審査、これは公開プレゼンテーションで審査いたします。これを交付決定いたしますと、そこに基金ということで、ある程度の金額を交付金として支出し、何年か事業を地元で行っていただくということで、今、我々の総額は6億円を用意しております。そして、これは平成33年までの事業で実施しています。受け付けは平成24年度から行いまして、平成28年度までを予定していて、事業期間は平成33年までということです。

平成24年のときに、この三つをまず採択しました。

「WEB版道の駅による天竜区観光産業活性化事業」。これは、実は、現地にライブカメラを定点で置きまして、水窪ですが、水窪地域を常に映すのですね。これは東京とか、全

国の水窪出身の方などがWEBで見られるのですね。そうすると、「あっ、懐かしい」とか、出身でない方も見て、懐かしいと思えば、通販サイトを持っていますので、そこで物産を売ったりするというような、そういうご提案があったものですから、今、事業を進めているところでございます。

一つ飛ばしまして、この「水窪の自然と文化を活かしたまちづくり事業」。これは、地元の山でいろいろ作業をされている方々がNPOを起こしまして、地元の100名山整備で、案内とか山道を整備しまして、そこでヤマビル退治とか、そういうこともやっけていらっしゃるというふうな試みでございます。

それで、平成25年度は、この四つの事業を採択しました。

「元気シニアによる地域資産継承・活用事業」。これを遊休の茶畑を、遊んでいる茶畑を今、借り上げまして、その耕作を始める。それから、阿多古和紙という和紙を復活させようという試みをしていただいております。

次の、こちらの「遊休農地を活用したそばの里づくり事業」。ここも遊休農地にソバの種をまいて、ソバを収穫し、そして、そば打ちでそれを販売しているというところでございます。

そして、次の「田舎ゆったりプロジェクト」。ここも遊休農地。やはりどうしても人が足りない遊休農地が増えるのですけれども、そこを何とかしようということで、田んぼを今、一生懸命若者たちを呼び込んだりして、田植えから稲刈りまでずっとやっております。そして、田畑のオーナー制度なども設けているところでございます。

そして、最後のところ。これは、「地域文化を核に都市間交流」ということで、地元の地域の自然を撮影して暦をつくったのです。それで、その暦を売っていこうと。それと、東京との交流を地域だけでやっています。短い期間でしたけれども、先日も東京の中野プロ

ードウェイにブースを出しました。

こういうことを地元から提案いただいて、そういう事業に対して、我々が金銭的な支援をしていこうというものでございます。

次は、「市内間交流を核とした中山間地域の定住・交流促進事業」ということで、浜松市は、先ほどから言っているように、非常に大きな市でございますので、市内の都市部と中山間部の交流を図ろうではないかということで、今、いろいろな事業を各層、高齢者からお子様までの幅広い層をターゲットとしております。

まず、第1の「交流情報の拡散」ということで、何をしているかということ、中山間地域のPR。この浜松の駅前でイベントを行ったり、東京で先ほど言ったようなポスターを出したり、相談会を行ったり、いろいろなことを今、行っているものでございます。

そして、2番目。こちらですが、「中山間地域めぐりツアー」。小学生の親子交流バスツアーを今、企画して、これは、旅行会社に少し委託しようかなと思っております。

次、「子ども中山間地域交流」。これは、小・中・高の部活動とかスポーツ少年団等々を初めとしたそういう団体を対象に、山と都市部のところの交流を図りたいと思っております。実際今年は小学校の交流を始めました。

そして、次の4番目、こちらが「地域づくりインターン」。これは市内、市外の大学生が2週間くらい、体験でそこに少し住んでいただいて、宿泊等をしていただいて、若者たちを取り込んで、その情報発信をしようかなと思ってます。

最後の五つ目、「交流ネットワーク事業」ですが、これは、農作業とか祭りとか、先ほど言いましたが、人手不足の場合はボランティアで一回入り込んでみようという都市部から来てくれる人たちにつなごうと。お互いに希望があるのだったら、そこをコーディネートしようということで、昨年ですが、六つ

らしい事例がございました。こういうことも進めていこうと、今、思っているところでございます。

これが、市内間交流をまずやってみようということでございます。

これは、そういう事例ということで、こういう農作業に若い方たちが来たり、お祭りとかイベントで来たり、これは、からくり人形ですが、こういったところに来たりしています。いずれにしても、こういう都市部と中山間地域が市内交流をしたらどうかということでございます。

まずそこから始めて、我々も今、こういう三遠南信全体で交流も始めておりますので、とにかくいろいろなことを仕掛けてやってみよう。中山間地域をまず知っていただく。都市部の人たちに知っていただくのだと。

「浜松にもこういうところがあるよ」と。これは三遠南信相互に広げられれば、なおよろしいかと思っております。

昨日、峠の国盗り綱引きがございまして、これは、飯田市の南信濃地区と、我々浜松市の水窪地区とで、もう28回を数える峠の綱引き。4年ぶりで浜松が勝ちましたので、ほっと胸をなでおろしているところでございます。でも、まだ2メートルばかり、向こうは陣地があるものですから、「何とか諏訪湖までたどり着きたい」と市長が言っております。これも一つの大きな地域の交流だと思えます。

それで、もう一つ。今度、11月30日に「三遠南信ふるさと歌舞伎交流浜松・佐久間大会」というのがございます。これも、もう21回を数える歌舞伎の交流ですが、豊橋市、湖西市、下條村、大鹿村、そういったところの皆さんとの交流を図って農村歌舞伎をやっている。

いずれにしましても、そういうような地道な交流を通じて、我々中山間地域を知って、そして、お互いにいいところを取り入れなが

ら進めていきたいというのが我々の考えでございますので、今後とも我々をはじめとして、皆さんと一緒に頑張って勉強したいと思っておりますので、ぜひともよろしくお願ひしたいと思ひます。

私からの説明は以上でございます。どうもありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

どうもありがとうございました。

ただいま報告いただきました内容について、何かご質問、あるいはご意見でもよろしいかと思ひますが、もしございましたら挙手をお願いいたします。

非常に魅力的な取り組みをされているなと感じながら聞いておりました。よろしいでしょうか。

それでは、ここからは、今の浜松市の岩井様の報告も踏まえながら、意見交換に移ってまいりたいと思ひます。

時間が非常に限られた中での意見交換となります。毎回ですが、1人当たりの発言を3分程度ということでお願いをいたします。円滑な進行にご協力をお願いします。

それでは、ご参加されている皆様に通ひ、最低一度はご発言をいただきたいということで、まず、それぞれの団体が定住促進、あるいは地域の活力の維持のために取り組ん

でおられる具体的な事例について、ご紹介をいただきたいと思ひます。

それで、トップバッターは、先ほど全体会でもパネラーを務められました新城市の穂積市長から、お願いいたします。

新城市 穂積市長

すみません、恐縮です。大分しゃべりましたので、ほかの方に時間は譲らせていただきたいと思ひます。簡単に、今、新城市で取り組んでいる定住、若者関係の政策だけを紹介させていただきます。

まず、そのものストレートにずばりですけれども、若者政策のワーキングチームというのを立ち上げまして、これは、若者政策というのは言葉として余りまだこなれていない、認知が広がっていないものですが、国でも若者政策という言葉が少し出てきております。

要は、日本創成会議の増田レポートで、東京一極集中からの転換、地方の再生というもの、やはり若者や女性が活躍できる社会をどうつくるかということですが、新城市も御多分に漏れず、人口の流出が続いておまして、特に若い世代の人口流出が他の世代に比べて大きい。その上さらに、いわゆる出産適齢期にある女性の転出が非常に強いという実情がございます。

そういう中からいかに転換をしていくのかということですが、やはり我々の世代は、現在の若者が抱える問題というのを、実はわかっているようでわかっていない面がたくさんございます。現代の雇用情勢、あるいはさまざまな経済環境の激変の中で、若者たちが抱える課題を市全体が世代を超えて共有して、若者のための政策、総合的な政策づくりを始めていこうということで、若い人を中心に、今、そのワーキングチームをつくり、来年には若者の総合政策の策定と若者議会の創設に向かって一歩を進めていき

いと考えています。都市的な基盤の充実とともに、いろいろな雇用の場の創出などたくさんの方の要望がありますけれども、若者目線で見たまちづくりについての意見集約をしながら、必要な対策を講じていきたいということでございます。

それとあわせまして、新東名のインターチェンジができますので、もちろん雇用の場の確保、あるいは観光交流拠点としての道の駅の整備などを進めております。また、新規就農の方の受け入れがこここのところかなり進んでいまして、市内の作手地区というところを中心に、年間4人から5人の都市部からの移住者による新規就農が、ここ二、三年続いております。それにはJAと、それから、農林業公社といひまして、農地の保有の合理化を行う中間管理機構ですけれども、それと市の農業政策部門がワンフロアで一つになって、今、事務所をつくりまして、さまざまな受入体制の整備や情報提供などをしております。

その体制が比較的スムーズにいったことから、さまざまな農協の部会の方々にお願いをしながら、さまざまな施設園芸などについて、都市部から移住してきた若い人たちが農業で希望を持って暮らせるような仕組みづくりをしていますが、その中でも一つの大きなネックになるのが、やはり住宅の確保でございまして、今、市内全域挙げて、空き家の調査に入り、空き家対策に向かって一歩を進めていかなければならないのかなと思っているところです。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

非常にさまざまな角度からいろいろな定住、あるいは雇用の創出に向けた取り組みがなされていると伺いました。

それでは、売木村の清水村長さん、お願い

いたします。

売木村 清水村長

私は、人が訪れる村、訪れたい村をつくりたいなということで、今、村長になって2年少々であります。積極的にイベントの開催をしております。以前より、「うるぎ米そだて隊」というようなイベントもやっておりました。これは、売木村に7回、農作業に来ていただいて、「7回皆勤をすると、米1俵60キログラムを皆勤賞として渡します」というような大盤振る舞いなイベントで、これは赤字ではありますけれども、7回来ると、本当に売木村が身近になるということで、そんなイベントもやっておりました。それに年間通して、春色感謝祭とか秋色感謝祭、また、溪流釣り祭り等は以前やらやっていたのですが、昨年、「田舎暮らしすすめ塾」という塾を始めました。これは、売木村に1ターンされた方がコーディネーターになりまして、その都度募集をしまして、これも年6回ほど開催するイベントであります。非常に人気がありまして、キャンセル待ちというような状況ではあるのですが、その中からまた定住につながってきてもおりますので、始めてよかったです。

また、今年は「うるぎ星の森音楽祭」といって、売木村に県のオートキャンプ場がありますので、その芝生広場を使って、1,000人規模のイベントをしたいなということで、売木村の人口は600人です。その倍に近い人口を集めたいということで、浜松市、豊橋市や、そこらじゅう回って、イベントに参加のお願いをしまいたったわけです。1,000人は達しなかったわけですが、それでも人口に近い550名が音楽祭に集まってくれたということで、売木村に来ていただいて、売木村を知っていただくと、「ほんにいいところがあるな」と思っただけということで、いろいろ進めております。

また、売木村は標高が1,000メートルから1,300メートルの山に囲まれた盆地であります。そして、村の中心地が820メートルといったような準高令地でありますので、そこを利用して合宿地にしたいということで、今、進めております。

そんな中に、私、実業団でマラソンをしていた選手と知り合うことができまして、それこそ先ほども出ておりました地域おこし協力隊ということで、3年間の任期で、今、売木村の臨時職員として勤めていただいております。彼は愛知県岡崎市の出身ですが、フルマラソンとか駅伝の選手で、実業団で活躍していました。もうフルマラソン、スピードにはついていけないということで、自分の勝負できるのは、今度は長い距離だということで、ウルトラマラソンに転向しました。

そのウルトラマラソンに転向したことによって、それぞれの大会に活躍をしてくれまして、100キロメートルのウルトラマラソンの部では、今、世界ランク5位です。それで、24時間耐久マラソンという種目がございまして、それですと、今、世界ランク2位ということです。それによりまして、売木村に合宿に訪れる人が非常に多くなってきてまして、去年は300人余でしたけれども、今年はもう1,000人を超す皆さんが合宿地として売木村に来ていただけるようになったということです。

それもNHKの番組で取り上げていただいたということで、関ジャニの番組で、「明日はどっちだ」という番組がございまして、それで9回ばかり取り上げていただきました。そして今度、タイで12時間のマラソンがありまして、それは11月1日・2日とやりますので、それに密着して、またNHKがついていってくれと。NHKも、その「明日はどっちだ」という番組で、売木村の崖っぶちのランナーを取り上げたということで、崖っぶちの村と崖っぶちのランナーを取り上げた

ということで非常に視聴率が上がりました。今年の3月に、もしかしたら終わるかという番組が、売木村を放送することによりまして、その都度、視聴率が上がるということで、いまだに番組が続いております。時たま売木村を取り上げていただいているということで、本当にありがたいことでもあります。

そんなことで、何とか人に来てもらいたいなということで、いろいろ取り組んでおります。そんな状況であります。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

本当に小さな取り組みがうまい循環を生んで、非常に具体的な取り組みに発展しているということだと思います。

それでは、続いて、東栄町商工会の会長、井筒様より、取り組みについてご紹介いただけたらと思います。

東栄町商工会 井筒会長

私どもの町では、平成24年度から総務省の補助制度を活用して、毎年3戸の空き家を町が借り上げて、水回りであるとか、そういう生活の中心になるところをリフォームして、月額3万2,000円という格安な値段で、また、子供のいる家庭については、さらに2割を引いた額で貸与し、空き家の有効活用を通して町と都市の住民との交流を拡大し、定住促進を促し地域の活性化を図るための空き家情報活用制度を創設しております。これは、行政のほうを中心になっている事業でございまして。

そして、私どもは、商工会という立場で、経済的な部分を地域でどう活性化させていくかということでございます。これにつきましては、商工会が中心になりまして、農地の活用をすることによって、それを経済発展につなげることはできないだろうかというこ

とで、いろいろ意見をまとめたところ、私どもの地域には自然に自生しているものも数多くあるわけですが、山菜を使ってビジネスにつなげていこうということで、この平成 26 年度にはさまざまな実証実験を行いました。例えば、山菜を使った料理をするツアーであるとか、これは、豊橋市にあります豊橋鉄道にお話をしまして、その協力を得ながら、観光バス等も回してもらうということで、これから山菜を使った経済的な底上げをしていきたいということで取り組んでおります。

それから、行政からは地域おこし協力隊を 5 名雇用しております。その 5 名の方にも全面的な協力を得ながら、いろいろな商品開発であるとか、商品開発というのは、今言ったツアーとか、そういうものも商品の一つとして、いろいろな提案や実際に行うときの手助け、いろいろなところで活躍をしていただいております。

それから、商工会独自としては、青年部が少子高齢化の中、若者の嫁不足が深刻となっておりますので、婚活イベントなどを開催して、本年は 4 組のカップルが誕生し、これまでに 3 組が結婚に至っているということで、着実に、少しずつですが成果を上げています。

そのようなことが今、東栄町では促進事業の事例としてあると思います。

また、「住」のほうですが、民間の住宅開発と、それから、行政が手助けをしてインフラの整備をすることによって、東栄町の中に 18 戸の区画を整備して、今、売り出しをしております。これも定住を進めて、やはり住むところの確保ということです。都市の人に空気や水のきれいな東栄町に住んでいただきたい。浜松、新城等にも通勤可能な地域になってまいりましたので、ぜひ三遠南信サミットの中でも、そういう部分も取り上げていただけたらと思います。

それから、昨年度の飯田市でのサミットで

私が発言したことを思い出しているわけですが、この地域の背骨の一つとして三遠南進自動車道が着実に整備されているということとともに、飯田線の活用を真剣に取り組むべきではないかと思います。特に高齢者が多くなる中で、車を運転しなくても、癒しであるとか、ゆったりとした日を過ごすということについては、鉄道をうまく活用することによって、そういうものが開けてくるのではないかと考えております。

また、平成 26 年度からは東三河広域経済連合会という商工会議所、商工会の構成でできているわけですが、これには各市町村長も参加をしてくれ、色々なところで助言をいただいているわけですが。この中で、飯田線の活性化を図るために、今後、研究会を設置して、提言を取りまとめ、JR 等に提案をしていこうということで発足をすする運びとなっております。そのような状況で今、進めております。

そして、今日ここで、私が一番お願いをしておきたいと思っております。やはり中山間地で、それぞれの形で自分たちの力でやれることはそれなりに努力をどこの市町もしていると思う。ところが、やはりこの三遠南信サミットの一番の仕事というのは、ここの地域に住んでいるどこの人にも何らかのいい意味での影響、そういうものがなければいけないのではないかとということで、私ども東栄町のような地域には、積極的な都市に住んでいる人たちの理解というものが必要になるのではないかなと思います。

先ほどからの報告の中でも、さまざまな形でイベントとかいうものに通じて努力をしているわけですが。そういうものは、あくまでいわば宣伝の段階であって、中身を特化するということはなかなか難しいということでございます。そういう種をせっかく今まいてくれている中で、田舎の特徴、田舎のよさをしっかり見ていただきたいと思

ます。例えば、安い土地の利用。一つの例を言いますと、例えば福祉施設のようなものは、山間地で広い土地にゆったりとした施設をつくることによって、三遠南信地域の全ての人を対象にした受け入れができ、雇用も生まれ、人口の減少も少しでも食いとめることができると思います。それから、消費も拡大するというところで、イベント的なものばかりではなくて、定着するものを真剣に考えてもらうことによって、町の人にもいろいろな意味でメリットを感じてもらえるようなものが皆さんの工夫によってできるのではないかなということをおは常々考えているわけでございます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

あとお二人の方に具体的な取り組みをご紹介いただきたいと思います。続いて、森町商工会会長山本様から、ご紹介をお願いします。

森町商工会 山本会長

私のところは、一昨年の新東名の開通以来、大変多くの方に、この森町に来ていただいております。30%ぐらい従来より多くなっています。

そういう中での経済効果はということですが、余り期待できなかった。何とかしなくてはという思いの中で、本年3月末に、「もりまち志農工商サミット」というものを開きました。「しのう」の「し」は志す。農業と商業、工業を含めた、全ての産業を網羅した中で、色々な思いをここに集めて議論しようということで、皆に呼びかけ議論しました。小國神社の門前町ということ、お店ができています、そこを中心とした話が中心になりましたが、そういうことが発端で、「では」という話になったときになかなか

話が進んでいかない。

森町は小國神社を中心に、大変神社仏閣等が昔からたくさんございました。また、四季折々にはいろいろな花が見られる。紅葉しかり、そして農産物。トウモロコシや次郎柿、そして、お茶、レタスと、大変豊富な農産物がありまして、「これらを観光に活かすことが」というような話も出ておりました。これからこういった問題をどういう具合に利用しながらお客を呼び込めるかということ、議論はすれども具体的な例が出てこないということで、その後、もう一度そういうことを議論したわけですが、実を結んでこない。

やはり森町も御多分に漏れず、人口もどんどん減っているという中での取り組みとして、それぞれの思いの中で、例えば婚活事業ですね。七、八年前にやったときに失敗しました。男性30人に対して女性2人だけでした。これは大変なことだからと思って、失敗を例にして取りやめたことをお話ししましたら、近隣の商工会が、「では、一緒にやろうよ」というようなことで、そういう取り組みも今は行っております。

また、独自に青年部の人たちが、「森町、人が減っては大変だから、我々の仲間をつくろう」ということで、婚活事業も今、計画中でございます。これが実を結んでくれることを祈りながら今いるわけです。これからこの森町にどういう方に来ていただいて、どういう方に頑張ってもらって、どういう方に住んでもらう、こういういろいろな思いの中での取り組みをしております。すなわち、森町は静岡県の内陸フロンティアの構想のもとに、三つの種類の特区の認可をいただいておりますが、これは国も理解していただいているわけで、それぞれの特区の目的に向かって、これからどういう展開していけばいいかということ、今、行政とともに議論している最中でございます。皆さん方のまたいろいろな意味でのご支援、ご示唆をいただければあり

がたいなと思っております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

それでは、あとお一人、根羽村の大久保村長からご発言をお願いします。

根羽村 大久保村長

私どもの村、ちょうど愛知県で一番高い山が1,415メートル、茶臼山になります。そこが根羽村と愛知県の豊根村の山頂になりまして、そこから源流となって矢作川が一色町まで流れている。そんな私どもの村でありまして、やはり日本の国土といいますか、地域は、山、川、海、上流、中流、それから下流という、そういう流域で昔から生活圏が形成されている。

そうした中で、どの地域にも、やはり人が住み続けられることがないと、例えば、上流でだれも住めなくなってしまったとなると、もう当然山が荒れて、土砂が出てきて、あるいは川とかの保水機能が全部なくなって、流域全体がだめになってしまうのではないかと、そのような気持ちで、私どもは今住んでいる地域、昔から住んでいる上流、中流、下流、どの地域にも人が住み続けなくては安全な国土を守れないのではなかいかという、そんな地域づくりをしているところであります。

その中で、村の中では三つの循環。

まず、その地域、小さな地域、根羽村が住む地域づくりと、根羽村だけでは住めませんので、それを流域圏ですとか、こういった三遠南信とか、そういう大きな圏域で応援してもらいながら住み続ける、そんな仕組みをつくりたいと思っております。

まず、小さな循環といいますか、村づくりでは、一つは、やはり先ほども出ていましたけれども、働く機会だとか働く場所、それからあと、小さな地域内の経済の循環、それか

ら、小さなサービスの循環というのをそれぞれの地域に残しておかないと、やはり生活できないと思います。

まず、一つは働く場所、雇用の循環については、先ほど新城の穂積市長もおっしゃっていましたが、私どもも92%が山でありますので、その森林に付加価値をつけて、それで働く機会、雇用のチャンスをつくる、また収入を得るといような形で、丸太に付加価値をつけて住宅用材、あるいは建築用材として、直接現場までお届けする、そういったトータル林業の仕組みを、今、取り組んでいるわけでありまして。

これについても、先ほどの話の中でも、今、公共建築に非常に木材が使われる仕組みができてきました。ただし、公共建築で木材が使われるというだけで、それが地域材とか、そういったものはほとんど使えないような状況。それは、先ほど穂積市長も言われていましたけれども、山元の小さなところでは、例えば公共事業は1年単位でやりますので、発注したときにすぐに材料を納められない仕組みであれば、それはできせませんので、それについては、私どもとしては、きちんと公共団体で事前にもう発注情報を出していただいて、2年、3年前にも出していただいて、それを私ども山元といいますか、できれば流域の中の地域材をそこへ使っていただくというのが地域づくりになりますので、そういった制度改正は何としてもお願いしたいといえますか、つくっていただきたいというのは国へも要望しております。

もう一点、分離発注について。私ども、たまたま去年、高齢者の大きな福祉施設をつくりました。これについても、私どもJASの工場を森林組合が持っております、建物を一本で発注してしまいますと、本当に部品の一部にしかありませんので、これは分離発注をさせていただきました。やはりこれも、制度的に木材は地域づくりの一つの手段とし

て分離発注ができるというのも公共建築にはぜひ取り入れていただきたい制度改正であります。そのような動きもしております。

それとあと、高齢者福祉施設の中でエネルギーをどう使うかというお話もありました。私どもは山ですので、端材とかがいっぱい出てきます。それを使ってボイラーでくべるような形。ボイラーでくべるには、木を乾燥させるなどいろいろな問題が出てきますので、では、それをくべるNPO、小さな会社を立ち上げようというような形で若い人に立ち上げていただいて、それで地域の中で一つの新しい雇用とか、働く場所のチャンスもできた、そんな林業に取り組んでいる部分もあります。

それから、あと、小さな農業をやりながら、小さな林業をやりながら、また、小さな観光のコーディネーターをやり、一人でいろいろな職業を持ちながら、ハイブリッド的に働いてもらって、それで生活できる。全員というわけにはいきませんが、そんな私ども山の中の取り組みも、そんな働き方も、今、提唱しているところであります。

もう一つは、地域内で経済の循環といえますか、地元にあるガソリンスタンドだとか、商店だとか、床屋さんだとか、生きるための最低限のそういった経済の循環は残しておかなければいけないと思います。それがなくなったら、やはりだめですので、なるべく地元のお金を地域の中で動かせる仕組みというような形を考えております。

たまたま今、東栄町もやられておりますが、全国で40ぐらい、「木の駅プロジェクト」というような形で、木を出してきて、それを地域通貨にかえて、その地域通貨を地元の中でぐるぐる回すという仕組みがあるのです。田舎は当然、例えば、ガソリンは高いのも当たり前ですが、それを地域通貨みたいなもので補ってやれば、地元で最低限のものが回りますので、特に商工会の行うプレミアつき商品

券ですとか、それも地元で絶対回りますので、そういったものは必ず残したいなというか、今、一生懸命取り組んでいるところであります。

もう一つは、サービスの循環ということですね。これはいろいろなサービスがありますけれども、教育、医療、福祉、さまざまなサービスがあります。私どもはやはり保育園、小学校、中学校は、小さくても一つの自治体の中で何としても踏ん張らせたいという形。それから、特に小さくてできるというのは、保育園、小学校、中学校が連携したいろいろな教育ができますので、非常に特色的な教育ができます。それを逆に都市部の皆さんにもPRできればと思っているところであります。

特に医療についても、うちも開業医の先生がお一人おられますけれども、今は、やはり人口がある程度ないと開業していくのは非常に難しい制度になっております。今、地元からお医者がなくなってしまうたら、生きるためにも大変というようなこともありますので、私どもは、開業医の先生に器具を応援させていただいております。ある程度の医療機械は村で先生にお貸しするとか、そのような形で医療を支えております。これについても、やはり国へ、地域の開業医が何とか生きられる制度改正をお願いしております。

そのような取り組みをしながら、最終的には、私たちが自分たちの住むその地域に、我々がといいますか、住んでいる人が自信と誇りを持っていなければ次の子供たちは絶対出ていってしまいますので、何とかそこでしっかりと自信と誇りを持って、そのことを子供たちといいますか、次世代につないでいくのが我々の役目かなと思ひながら頑張っております。現実にはなかなか厳しいものがありますが、そんな取り組みをしているところであります。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

今、五つの団体、自治体あるいは商工会の方からご発言いただきました。

これは私の感想になりますけれども、しばらく前に比べると、それぞれの自治体なり商工会なりで積極的にいろいろな取り組みをされている。それが具体的に新規就業であったり、あるいは定住であったり、Iターン者が出てきたり。本当に具体的な成果がそれぞれ個々のところで出てきているのだなと素直な感想として持っております。

これも、もちろん国の政策、先ほどから出ています総務省の地域おこし隊の長い間の取り組みであるとか、あるいは今の社会の大きな流れとして、若者がかなり自然志向といえますか、都会からちょっと離れて自然に戻ってみようかという、流れがややできつつあるのかなと。

そういうことも踏まえながら、この三遠南信地域というのは、今日の最初の全体会の議論にもありましたように、新東名が供用開始され、あるいは三遠南信自動車の一部供用開始ということで、この地域全体の、いわゆるフットワークというか、アクセスが非常に容易になってきた、時間距離が非常に短くなってきたということとうまく相まって、いろいろな成果が出てきているのかなというのを感じました。

もう一つ気になったのは、JR飯田線の活性化の話であります。これは、豊橋市長も以前、そういう話をされていましたが、私もこの間、JR東海の新幹線の開業 50 周年ということで中日新聞がインタビューに来たときに、「いわゆる交流人口を増やすためのこの地域の方策として、飯田線を活用すべきではないか。リニアと東海道新幹線とつなぐ、いわゆる在来の鉄道として飯田線というのは重要ではないか。飯田線を観光列車にした

らどうか」という発言もしたのですけれども、これは、JRから見てなかなか難しい問題のようです。

時間が少し押していますが、次は、今、いろいろな取り組みがなされているということで、もともとこの地域には、特に中山間地域にはいろいろな魅力であるとか、さまざまな森林資源であるとか、非常に数多くあるわけです。こういった魅力である資源について、改めてもう一度ここで確認をさせていただきたいと思います。

魅力、資源というものを、この中山間地域の中から見ると、魅力、資源を外から見る視点と、それぞれ二つあるかと思えます。それぞれの立場からのご意見を伺えればと思います。

それでは、最初に、これは外からか、内からか、両方なのかもしれません。豊川市長の山脇様から、お願いします。

豊川市 山脇市長

今、中山間地域を外からか、内からか、というお話がありましたが、ちょっと微妙なところですね。豊川市は、平成 18 年から平成 22 年にかけて、3 回、周辺の町と合併しました。それによりまして、約 160 平方キロメートル、人口が 18 万人を超える規模になりました。北は本宮山という 789 メートルの山、そして、南は三河湾に面して、海、山、川のバランスのとれた地域になったと思っております。

先ほどの浜松市のお話を聞きますと、面積ですと豊川の 10 倍、人口ですと 5 倍という状況で、浜松市の中山間地域は大変厳しい状況であると認識をしたところです。豊川市はそれほど広くもありませんし、また、市内を約 30 分で通り抜けることができますので、そういう状況のところはないかと思えます。

ただ、今、東三河では東三河広域連合を設置する方向で、いろいろ議論をしているとこ

ろであります。やはり東三河の北部の方々といろいろな交流をしっかりとしていこうと思っています。これは、設楽町への設楽ダム建設に向けて、下流地域が大変恩恵を受けるということで、山村都市交流拠点施設を計画しております。

このようなことで、地域の皆さんや下流地域の皆さんとのいろいろな交流ができれば、いい機会になると思っています。

既に豊川市は、平成 12 年から野外センターとして設楽町に「きららの里」を設置して、小学生の野外教育をはじめ多くの方が利用しておりますが、これも設楽町には人の面でのいろいろご配慮いただいております、良い交流になっていると思っています。

そのようなことで、人口減少で山間地が大変厳しい状況であると聞いておりますが、我々としみしても、ここでしっかりと手を結んで、いろいろなところで中山間地域との交流を進めていきたいと思っています。

さらに、豊川市では今、校舎の建て替え時期が来ておまして、毎年順次行っている状況であります。木造校舎とまではいきませんが、内装においてふんだんに木を使った校舎を、建設しているということで、これも木材の有効利用で中山間地域に貢献ができるかなと思っています。

いずれにしても、豊川市は、ちょうど中間のような地域だと思いますが、しっかりと東三河地域が結束して、この人口減少社会をのり超えていかなければならないと思っています。

最後に、豊川市は平成 28 年度に向けて第 6 次総合計画を、策定中であります。その中で、今、「訪れたいまち、住みたいまち」ということで、いろいろな計画をしているところです。豊川市では、観光ボランティアの養成に力をいれておまして、大勢の市民の皆さんに参加していただいております。豊川市には 373 の NPO、およびボランティア団体が

あります。そのようなことで、地域の人たちも一緒になって、この人口減少社会をのり超えていきたいと思っています。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

次は平谷村の村長小池様。これは内から資源を見るという立場だと思います。

平谷村 小池村長

平谷村は全国でも十の指に入るぐらい人口の少ない村で、現在では 480 人台という総人口でございます。以前からは林業中心の村でございました。林業といっても、焚き木と木炭中心の村で、根羽村みたいな青い葉っぱの杉やヒノキのない村でございました。林業の衰退と同時に、前人が観光で生きるしかないということで、村の役場の位置というか、中心の位置の標高が 922 メートルぐらいでございますが、自然条件を活かす中での観光事業ということで、一番簡単には、避暑地にということで考えたわけでございますけれども、それにはやはりいろいろな施設が必要ということで、民間業者によるゴルフ場開発、村によるスキー場、温泉、フィッシングスポットというような開発を行い、今現在では 30 万人前後が年間に訪れてくれている村になりました。30 万人というと、平谷村の今の人口でいくと、1 日に倍の人口が村に訪れてくれているのだなと思っています。衰退した村ではございますけれども、訪れる人が、この人口を聞いて、「そんなに少ない人口の村か」というようなふうに錯覚されるような村でございます。ここに観光客が来てくれるということで、それをいかに利用するかということで、高原野菜を栽培し、それを還元しながら、村民が豊かに暮らそうということで進めてまいりました。

ただ、標高が高いということで、非常に農

業の品目が限定される中で、夏場のトウモロコシとか、秋の白菜とかキャベツ、そこらに限定されてくるわけです。最近では夏のトマトということで、大変好評を得ております。農作物にも品目が少ない中で取り組んできております。そういうものをいかに活かしていくかということで、今年度から、地域協力隊2名を採用し、これからの高原野菜をいかに有効に活かされるかなという研究等を今、させているわけでございます。

今年は、少ない水田の中に酒米をつくりました。標高900メートル以上のところにつくった酒米で、魅力ある酒ができるのではないかということで、今、取り組みを行っております。多分12月くらいになると、酒が作製されて味わうことができると思います。そのような取り組みを行いながら、500人弱の村民がいかに生きていこうかということを経験しながら過ごしているのが現状でございます。

魅力ある村をということでございますけれども、数少ない魅力でございますけれども、そんなことで頑張っておりますので、また、今後とも皆様のご助言やら進言をお願いしたいなと思っております。

コーディネーター

／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

やはり、自然が最大の強みであるということだと思います。

それでは、続いて、喬木村の村長、市瀬さん、よろしく願いいたします。

喬木村 市瀬村長

喬木村ってどこなのだろうという話なのですが、天竜川の対岸が飯田市でございまして、村の三方を飯田市に囲まれているという、総面積66平方キロメートル、人口は6,700人程度の村になっています。

長らく村は、就業先が飯田市の方で、住むところは喬木村ということであぐらをかいておりましたので、皆さんのような立派な活動ができていないということです。これから喬木村は、今年からですが、三遠南信自動車道の工事でも村内区間が始まりまして、村の中に二つのインターチェンジ、それから、リニア中央新幹線につきましては、ほとんどがトンネル区間という中で、うちの村は明るい空間で通過していくわけですが、長野県にできます駅から村の中心部まで5分という立地条件を活かした村づくりを進めていかなければいけないと思っております。

本日、コーディネーターの方からお渡しをいただいた課題が、「中山間地の魅力の再発見」ということですので、村のことはともかくとして、南信州広域連合全体の「こんな魅力があるよ」ということをご紹介させていただきたいと思っております。

先ほどから、それぞれの村長さんからご発言がありましたとおり、南信州の自治体というのは非常に小さな自治体でございまして、自分のところで何かを完結しようと思ってもなかなかうまくいかないということで、それぞれの自治体が協力し合って、お互いの仕事を分かち合って、連携し合って地域全体を盛り上げていく必要があるのではないかなと考えています。

伊那谷を振り返ってみますと、天竜川が築き上げました国内有数の河岸段丘と、中央アルプス、南アルプスに囲まれました圧倒的な自然景観と、きれいな空気と清らかな川が流れている地域でございます。

この非日常的な空間に身を置くことで、都会の方々が感じているストレスからの解消ですとか、リラクゼーションに最適な環境が伊那谷には整っているということで、この魅力ある伊那谷に、リニアを使いますと名古屋から20分、品川からは40分という、非常に近い距離で結ばれるということになります。

伊那谷全体は今までターゲットポイントはどうしても中京圏に、中央自動車道を使った圏域にということになっておりましたが、これから都市圏も含んだ広域の中で、この伊那谷の魅力を訴えることができるということで、潜在的なといいますか、これからこの地域は変わるのではないかなという大きな期待を持っています。

魅力としては、自然はもちろんですが、この地域には、温泉、ゴルフ場、スキー場、キャンプ場、それから、登山、すごく美しい夜空、星空だとか段丘が形成するきれいな夜景等がございます。

その中で、各町村で取り組んでおりますのが、リンゴ狩りですとか、マツタケ観光ですとか、イチゴ狩りですとか、収穫体験型の観光拠点としまして、「お客さんを取り込んでいこうよ」という動きが活発に行われております。

こういう体験を通して、中山間の暮らしですとか、自然を理解しながら、環境保全、産業につながる、昔からずっと言われていますけれども、グリーンツーリズムという言葉がこれからどんどん飯田市とタイアップする中で訴えていかなければいけないのではないかなと思っております。

ある調査によりますと、都市部の方々の4割が田舎志向で、仕事をリタイアした後、静かな田舎で暮らしたいと思っている都市部の方が4割いらっしゃるということなので、これを足がかりに、今、各町村でクラインガルテンですとか、いろいろな滞在型観光・農業について研究を始めているところですが、結果として、何かすごく感触を得ておりますので、これを手がかりにしまして、伊那谷の方に二地域居住の可能性ですとか、週末リゾートの方向ですとか、そんなことをこれからどんどん考えていけたら、この中山間地の魅力をアピールできるのではないかなと思っております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

南信州、伊那谷全体の魅力をご説明いただきました。最近私も飯田には結構頻繁に行っていて、あそこは非常に気に入っております。

次に、NPO法人の川名のひよんどり保存会の前嶋会長さんよろしくお願ひします。

川名のひよんどり保存会 前嶋会長

まず、このパンフレットですが、これは、私ども旧引佐町の周りの6団体が、本当に民間で自分たちの保存会員のお金を集めまして作ったパンフレットです。1団体でこれだけ作るとお金がたくさん掛かりますので、その中で少しずつ出し合って、作っております。

このことでまず申し上げたいのは、先ほど市民部長からお話ございましたように、緑のふるさと協力隊という女性の方が引佐町におみえになります。私どもの中に「はらみの舞」というのがございまして、それをこの緑のふるさと協力隊の方にお願ひをいたしました。これは、どこかの団体が聞きますとおしかりを受けるかとも思いますが、1426年からですので、今年は2014年ですので、この川名のひよんどりが今年でおよそ590年になります。その中で女人禁制というのが約600年の間、守られてきましたが、今年初めて女性をこの舞に登用し、私が決断して舞を舞っていただきました。長老の方からは少しお小言をいただきましたが、そんなことは気にせずに、来年度、正月4日ですが、またそれも女の子の舞をお願ひしております。ぜひご覧をいただきたいと思ひます。

「元気な浜松！懇談会」というのが浜松市にございます。私が出席をいたしまして、「はい、市長。私どもはこういうものがございまして、浜松市全体で何かいいことはございませんでしょうか」と言ったら、「よし、わかっ

た」と言うものですから、「本当にわかったかな」と思っていましたら、先ほど市民部長からご紹介いただきましたが、浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会というのをつくっていただきました。これは浜松市全体です。ですから 20 団体ございます。でも、1 団体の中に浜松市の大念仏などは 60 組ぐらい入っていますので、本当に浜松市全体の無形民俗文化財がこの中に参集をいたしております。

一つ例を挙げますと、水窪という地域がございしますが、水窪の西浦の田楽。これは、無形民俗文化財の国の指定をするというときに、静岡県ではなくて、日本でも第 1 号として国の指定を受けた西浦の田楽もこの中に含まれております。

これからも活躍しようと考えておりますが、私どもだけではなくて、実は、これも三遠南信ですので、三河の地域でも伝統文化・芸能が非常に盛んだということは私ども承知をいたしております。今年も阿南町の雪まつり、そして、行者まつりなども見学をさせていただきまして、今、阿南町とも交流がございします。

先ほどの会議の中でコーディネーターの方から、世界文化遺産にというとお話しが少しございました。私どもも世界文化遺産を目指しております。富士山は山ですが、私どもは、これは人間がもう 500 年、600 年の伝統を引き継いだ伝統文化ですので、ぜひともそういう意味では文化遺産を目指してまいりたいと考えております。文化遺産に登録、そういうことで努力したいと思っております。そうすれば、世界からとは言いませんけれども、それでも日本全国から相当の部分のお客様がお見えになる。私どもは 1 月のお正月から 12 月まで、ずっと伝統文化の行事がございしますので、そういう意味でも日本全国からお客様をお迎えすることができる。そうすると、この伝統文化のよさというものをご理解いただけるのではないかと考えております。

そこで、「では、ここに住もうではないか」、「結婚してここに住もうではないか」という方も出てこられるかと思しますので、そういう意味でも世界の文化遺産を目指していきたいと考えております。

そうしましたら、あそこに三遠南信サミットと書いてありますが、その下に括弧でいいですから、伝統文化圏というような名前でも結構ですが、何か入れていただきたいなど。それほどこの伝統文化というものを重要視していただきたいと考えております。私は民間ですので拙いお話ですが、簡単ですが、そういうことでこれからも頑張ってもらいたいと思っておりますので、三河の方々、あるいは南信の方々、阿南町とかその辺の方々もぜひともお頑張りをいただいて、ご賛同いただきまして、これから交流をしていただきたいと考えておりますので、ひとつよろしくお願い申し上げます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

4 人の方にご発言いただいて、この三遠南信地域の魅力、あるいは資源というものについて語っていただきました。

この点については何回もこの場で議論しておりますし、改めて確認をしたということになるかと思えます。自然景観、そして森林資源、今、ご発言のあった伝統文化、こういったもののまさに宝庫であるということだと思います。こういった資源を活かして、この地域の活性化なり、あるいは雇用の創出、さらには定住促進という形に結びつけていくかということが常に問われています。

それぞれの取り組みとして頑張っておられるわけですが、三遠南信全体として今後どう取り組んでいくかについて、最後に意見交換したいと思います。

一つは、恐らく上流と下流の交流をいかに

進めていくかということだと思いますし、この三遠南信全体として、あるいはもっと外の地域とも連携して、どのように取り組んでいくのかになるかだと思います。これらの点について、まだご発言をいただいている方に、お願いしたいということで、まずは豊橋市の佐原市長、お願いいたします。

豊橋市 佐原市長

私たちのところは、中山間地ではございませんので、外から見て、外からどうやって中山間地にアプローチするかという立場だと思っています。

今までいろいろな人とお話ししていて、中山間地はなかなか住みにくいかいろいろなことを言われていて、それをインフラの責任にしていたところがかかなりあると思いました。今、お伺いしていたら、私たちの町には高速道路のインターチェンジが一つもないのですけれども、二つもできそうな村がある。実は、東三河というのは高速道路のインターチェンジがある町が、今のところ8市町村のうち2市しかないのですね。ほとんどの町が高速道路と無縁の存在であり続けるという、非常に不思議な産業都市をなしてございます。

そうした町から見ていて、過疎地を抱えた方たちと議論していていつも私が疑問に思うというか、答えが自分に見つけ出せないのが、どうして息子さん、娘さんが帰ってこないのだろうかというところだったのです。これまでは、先ほどインフラの話させていただいたように、下水道がないからとか、高速道路が遠いからとか、いろいろなことを言われていたのですけれども、随分その状況は変わりつつある。場合によれば、私たちの町よりいいところがたくさんあるのに、どうして帰らないのか。いろいろ考えてみると、意外や意外、灯台もと暗しで、自分たちの町、村のよさを意外と自分たちで気がつい

ていないのではないかということをおっしゃることがあります。

それは私たち豊橋市でもそうなのです。豊橋市で人口密度の一番薄い、太平洋岸は片浜13里とあって、非常に広大な白砂の海岸になっています。そこに東京から子供たちの塾、理科系の塾をやっているグループの家族連れをウミガメの産卵を見せたくて呼んだのですけれども、今年は残念ながらウミガメがあまり上がってこなかったのを見る機会がなかった。私たちは焦っていたのですけれども、実はその後、海岸をただ歩き、地引き網を行ったところ、大したものはないのです、上がってきた小魚をバーベキューで食べてということをやっただけなのですが、「すごいところですね」と、こう言われたのです。

私たちはそんなことすごいと思っていなくて、ウミガメの産卵を見せられなかったから、もうこれはお叱りを受けるなど思っていたところ、「これでウミガメが見られたら、もう天国ですよ」と、話をされました。きっと皆様方の地域でも気づいていない、思っていないこと、大したことはないと思っていることで、都会の人たちから見て魅力的に映ることはあると思う。だから自分の息子、娘は帰ってこなくても、協力隊で来た人が住みつき、いろいろなことをするのはないかなど。これをいかに上手に自分の息子、娘にも見せるかということも大事なかなと思うのです。孫の顔を見たいなら、息子、娘を東京に出すなど言う時、こういう話でもしてみたらおもしろいなと思っているところです。

そんなことばかり言ってもだめですから、やはり雇用の場をつくっていくとか、交流というよりも定住の話も大事なのです。その点については、先ほども山村の農業、高原農業のお話がありましたが、里の下の側で私たちが成功している農業の成功体験を、里の上の高原農業に持ち込むということをやってみたいと思って、今、そちらにいます設

楽町と私たちは一緒に取り組みをやろうとしています。JAとどうやって上手に連携して理解していただくかということが大変大切だし、難しい問題だと思いますけれども、ここに向けて、頑張っていかななくてはということで、この1年ずっと準備を進めており、実現に持っていきたいと思います。

それから、自然に交流ができる仕組みづくりについて、この東三河広域連合をつくる準備段階でもいろいろなことをやってきましたが、一番わかりやすいものとして、ほの国こどもパスポートというものをつくりました。

これはどういうものかという、中学生までの東三河全ての子供たちにパスポートカードを持たせて、それを持っていくと、子供たちは他の市町村のいろいろな施設をただで入れるのであります。

例えば、私どもでいうと動物園があります。蒲郡市でいうと水族館があります。豊川も水族館があったり、東栄町は温泉があったりします。それぞれのところのいろいろなものを見てもらう。何と、今年からはスキー場のリフトまでただになってしまったんですね。そんなことをやっている、自然と交流が生まれ、子供たちが行きやすくなる。そうすると親は自然とついていく。経済的にも親がついてきてくれればお金がとにかく落ちるだろうということも踏まえてやっていく。

これは今、私たち東三河は広域連合を発足してうまく回り出したら、三遠南信でできないかという話を、多分私どもの事務局の側から持ちかけようとしているのではないかと思います。

同じように、こんなことをやっていたら、消防団の人たちに対するいろいろなインセンティブを与える手段としても、消防団カードというのも東三河で統一したらおもしろいので、私たちの町だけでいろいろな事業所がサービスを提供しているものを東三河全

体にこれも広げたら、きっと山登りが得意な消防団員は山に登りに行くでしょうし、泳ぎが得意な消防団、水防の得意な人たちは海に泳ぎに行くでしょうし、いろいろなことがまた起きるのではないかと期待をしています。

それから、最後に一つ。これは、どうしてやったらいいか、ちょっと思うのですが、いろいろなツアーを組むとなかなか難しいけれども、路線バスを使ったり、先ほどあった飯田線を使った路線バスツアーみたいなもの、今、路線バスの旅って結構テレビでやっていて、はやっていますよね。ああいうことと、皆様方の様な観光資源、それから、場合によれば旅館であったり、食べ物屋さんであったりやうまくつないでツアーが組めたらと思います。来年に向けて、おもしろいプランをできたらプログラムを立案しようと思っています。

そんなことをやることによって自然と人が動く。そして、それぞれの町の良さを知ってもらおう。そうすると、山派の人は山に老後住みたいと思うかもしれない、海派の人は海の近くに住みたいと思うかもしれない。いろいろなことが自然と起こってくるのではないかと、それを期待しております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

今は、上下流連携というか、交流をいかに活性化させるかというための方策、一つの提案だと思います。

それでは、今、話の出ました設楽町の横山町長さんからお願いします。

設楽町 横山町長

今度のテーマで、地域資源を活用した新しい上下流の交流促進策はどうかということ、そして、我々が関連組織で連携して取り組むべきことという、そういうテーマですが、設

楽町の地形を若干紹介申し上げると、東三河のエリアの中で一番北に位置をするところにあります。その東側は豊根村ですとか東栄町。そして、浜松市の境へ入っていきますが、どちらかという、豊田市の境側になります。

そうした中で、東三河のど真ん中を縦に豊川という川が一本流れているわけですが、全長が72キロメートルほどの短い川なのですが、その水源町が設楽町です。ほかにも矢作川、また、天竜川の水系にも属しているということで、水源地域の山林を抱えた町ということでございます。

先ほども話がありましたけれども、設楽ダムという国の計画が入っているということで、41年を迎えるわけですが、今年、太田大臣によって、「これを継続するのだ。建設していくよ」という方針が示されました。

我々、このダムが建設されるということであるというと同時に、町の中央部分に湖が出現すると、そんな位置関係になるわけですが、この場所、こうした状況を、やはり将来のためにどう活かせるかということの一つの中に、観光資源として使う、そういうところへおのずから知恵を働かせなければいけないだろうと思っております。

ただ、湖が出現して、多くの人たちが湖だけを見に来るのでは能がないなということも常々思っているところでして、そのために、人の流入というか、来ていただく方が足をとめて見てもらえる、そのような環境を整備したいなとも思っております。

その一環で、新城市側から入ってくる南の玄関口の豊川に面したところに、一つ、清崎というエリアがございます。設楽町は本当に山が多いところで、平場が少ないのですが、唯一平らを保有しているところです。そこへ新たに郷土資料館、これは既存のものがありますけれども、老朽化が進んだということもありまして、これを契機に新しく作り変えようということ、多くの人たちに改めて見て

もらえるような資源として、これをつくり上げたい。その横にコンビニがあり、また、ヤナ組合というか、そういった組合が経営しているアユですとか、そういったものを提供する施設があります。そうしたものを全部一体化して、道の駅構想に持っていこうと。そして、郷土資料館、買い物、それから食材の提供、その中に、また対面側にはアスレチック公園ですとか、子供たちが足をとめて遊んでいけるような、そのような環境を整備したいなど。そして、豊川に一本橋をかけます。その橋をかけた川沿いを約2キロメートル上流に上がりますと、129メートルのダムの堰堤が出現するわけです。

129メートルの堰堤にぶつかってしまうと行き止まりになるわけです。今のダムはこのダムもそうなのですが、そこに管理用のエレベーターがついております。そうしたものを利用させてもらって、そのエレベーターで129メートル上がるとダム湖が出現すると。その右岸側には下流市町で計画してもらう、上下流の交流施設をそこへ整備しよう。この交流施設の用地というのは、ダム本体を掘削したときに出てくる残土を埋めて、約9万平米という平らをつくるわけですが、そこへいろいろな、スポーツ交流ですとか、そういったものを主眼とした交流的な施設をつくっていきなさい。そして、さらにはダム湖周辺を周遊できるような、マラソン大会ですとか、また、秋の紅葉ですとか、春の桜ですとか、そういったようなものを見て楽しめるような環境を整備していきたい。

そして、さらには長尺の、本当に大きな長いレインボーブリッジ、これは宮ヶ瀬ダムというダムにはあるのですけれども、そういう大きな橋が2橋ほどかかり、また、周辺にもそういった橋梁等がかけられる。そんな風景が出現してくる。そうしたものを今後は利用して、観光の資源として、これを活かしていこうと思っております。そして、多くの人た

ちに来ていただき、イベント等を開催することによって、また、今までにない形のものをつくり上げていこうと、そんなことを一つは思っております。

そして、2点目としては、スポーツイベントというものに視点を置いてみてはというふうに思います。奥三河の地形は山岳地帯で、800メートルから1,000メートル級の山岳がずっと連なっています。新城市から始まって、東栄町、豊根村、そして設楽町、そういった、ぐるっと周遊ができるというような山岳があるわけですが、そうしたところを山岳トレイルという、そういったような競技ができるような大会を全国区レベルで押し上げていける、そのような状況をつくり上げてみてはどうかと。

それと同時に、サイクルスポーツロードレース。これは、例えば新城市を拠点として、257号を通過して設楽町、設楽町から一番山岳の高い高原道路を通過して茶臼山高原、そして豊根村へお入りして東栄町へ出て新城へ帰ってくると。これを周遊すると約100キロメートルから150キロメートルぐらいの延長ロードコースになろうかと思いますが、そうしたところをスポーツイベントとして活かす、そして、多くの人たちに来てもらえるような、そんなスポーツ大会を、これも全国区レベルで押し進めていけたらどうかということも思います。

そして、先ほど引佐の伝統芸能等、ご紹介がされましたが、この中部圏の中心地、この三遠南信というのは、昔から各地に伝統芸能というか、伝統で言い伝えられている、そういった行事がずっと盛んに行われています。これをもう一度見直すというか、大きくクローズアップさせるような、この三遠南信地域で押し上げていくような働きかけというものを、これからもう一度目を見開いて、多くの人たち、遠くの人たちもこうした状況がわかるようなPRを進めて、多くの人たちに来

てもらおう中での交流、そして観光につなげていくと。このような働きかけも重要ではないかなとは思っています。

思いつくまま、我々の地域で今後さらにこうした交流促進策ということも踏まえた場合に何ができるかなというようなことの一つの例として考えてみました。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

それでは、最後になりましたが、愛知大学の総合郷土研究所研究員の平川さんから、学の立場から、ご発言をお願いします。

愛知大学総合郷土研究所 平川研究員

学の立場と言われましたが、私は別の組織にも属してまして、御存じの方も多いと思いますが、2年前に三遠南信住民ネットワーク協議会という団体を立ち上げました。その団体は、東三河、遠州、南信州のNPOや任意団体、地域づくりにかかわる団体と個人が50団体集まりして、事業を連携・協働してすすめ、さらに三遠南信地域の交流連携も深めていくために立ち上げた団体です。また、ことし2014年7月から、新SENAが立ち上がりまして、そのオブザーバーという形でもSENAの一員として今後かかわらせていただくことにもなりました。

協議会では毎年、プロジェクトを組んで、我々のできる範囲の中で、そのプロジェクトを進めています。現在は、3つのプロジェクトを立ち上げ、特に力を入れているのは、三遠南信「祭り街道」連携プロジェクトです。

この「祭り街道」というのを、知らない方がいらっしゃると思いますので簡単に説明します。阿南町に「祭り街道の会」という団体が15年前に設立されまして、豊橋市から飯田市まで南北に延び、阿南町も通る国道151号を対象に、沿線自治体を「祭り街道」と

名付け、祭りや伝統芸能を広く認知してもらおうとPRする取り組みを行っています。

現在は、阿南町、豊根村、東栄町の3町村までの国道151号を「祭り街道」と呼んでおり、それをさらに南へ、それから北へ延ばしていこうと三遠南信住民ネットワーク協議会と連携して取り組んでいます。今現在、新城市に「協力をお願いします」ということで、話を進めている段階です。さらに、この後、東三河のほうでいえば、豊川市、豊橋市、さらには渥美半島、南信州のほうに行きますと、飯田市、さらに高森町、松川町、駒ヶ根市というところまで延ばしていければ延ばしていこうと考えているところです。

三遠南信地域の連携ですので、国道151号にとどまらず、遠州側にも広げていくことができます。先ほど前嶋会長から紹介がありましたように、市町村合併によって中山間地域を取り込んだ浜松市は、貴重な国指定重要無形文化財がある自治体になりました。岩井市民部長もこのことについて触れておられました。そのことを広く知ってもらうためにも「祭り街道」の遠州版として延ばしていきたいとも考えています。

さらには、東三河から遠州にかけての道路といえば国道257号があります。遠州側の祭り街道にとどまるだけではなく、国道257号を北上して設楽町まで延ばし、さらには、三遠南信地域の西側（南信州）の谷にある国道153号まで経由して、「祭り街道」をどんどん延ばして、それを面という形で三遠南信地域の「祭り街道」連携をつくり上げていくことも可能です。

これが現在、三遠南信住民ネットワーク協議会が進めているプロジェクトの1つです。

ただ、三遠南信住民ネットワーク協議会といっても、皆さん、本職である自分たちのNPO活動がありますので、協議会のほうに重きを置いて活動することはできないというのが実情です。

しかしながら、SENAの一員として我々協議会もオブザーバーという立場でありますので、何とか活躍していきたい、連携をしていきたいという強い思いを持って活動をしていますので、要望とは言いませんが、これも住民レベルだけではなくて、行政、それから、経済界を含めた、これまで以上の連携が今後必要になっていくだろうし、ぜひとも協力をしていただきたいと思います。

こうした取り組みは上下流の都市と農山村交流が促進されるという意味でもよいことだと思いますので、その辺のところも一つ、考えていければと思います。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

伝統文化のネットワーク化を図るということだと思います。

あと1分少々で5時になってしまいます。若干時間配分を間違えましたけれども、最後に私から簡単に、この後の報告会に向けての皆様のご意見の総まとめという形で確認をさせていただきたいと思います。

それぞれの自治体、あるいは商工会等で本当に多様な取り組みをされているということが確認できたと思います。特に私が今回感じたのは、皆様のご発言が、自分の自治体の中だけではなくて、もう既に周りの市町村と連携して何ができるかという観点からご発言をいただいていたというところに非常に感銘を受けたというか、既に広域連携は必須の条件であるという皆様の理解なのかなと思います。

特に東三河はこれから広域連合で、まさに東三河全体でどうしていくべきかという議論が多分進んでいるだろうし、南信州については、もう既に広域連合ができ上がっていて、そこでいろいろな取り組みを進められているし、浜松については、浜松市自身がもう中

山間地域を含む形の自治体ということで、最初にご報告ありましたように、上下流の連携をもう市独自で単独で進められていると。

それぞれができること、また、三遠南信全体で SENA として取り組む事業というのも多分あるのだらうと思います。その辺の整理をしながら、これからそれぞれがやっていく。SENA は SENA、それぞれの三つの県は三つの県、そして各自治体、それはできること、できないことがあると思いますので、そういう形で進めていく必要があるのかなと思います。

そういったことの前提に立って、これまで進んでおります、これからも進むであろう道路基盤整備の効果を活かしながら、やはり雇用創出、あるいは定住促進ということに向けて、産業分野、あるいは観光分野の施策をこれからはしっかりと推進をしていくということが1点だらうということ。

そして、この三遠南信の、特に中山間地域の持つ魅力、先ほどから出ています自然景観、森林資源、あるいは伝統文化、こういったものを、圏域の中はもちろんですけれども、外に対しても効果的な発信をしながら、外部からの交流人口をいかに増やしていくかという、そういう政策の検討を今後していく必要があるのではなかいということが2点目になります。

そのために、三遠南信地域内の行政、団体、経済界などが広域連携をいかに強化していくことが最も重要。当たり前のことではありますが、広域連携そのものがこれからますます重要になってくるだらうという、その3点で報告会では報告をさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

どうもありがとうございます。

最後、若干時間がオーバーしてしまいましたが、非常に中身の濃い意見交換だったと思います。

これで、「山・住」分科会を閉会させていた

だきます。

どうもありがとうございました。